

聖地のこどもニュース

# オリーブの木

No. 93

2024年10月

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN  
**平和の架け橋**  
PROJECT 2024

平和の架け橋プロジェクト2024  
報告を掲載



プロジェクト2024の一コマ。みんなで折った千羽鶴をプロジェクト最終日に「爆心地」で捧げる。

今年のノーベル平和賞は「日本被爆者団体協議会」に決まりました。68年間にわたって核廃絶を世界に訴えてこられた被爆者の方々に心から祝意と敬意をお伝えします。ウクライナや中東で核兵器使用が危ぶまれる中、本当に意義のあるものだと思います。私どもの2005年以來の「平和の架け橋プロジェクト」の参加者、3カ国の青年たちも何度も証言を聴き、被爆者たちがあれほどの苦しみにもかかわらず、憎しみや恨みを抱くのではなく、核なき世界の実現に人生を捧げておられることに驚き、感銘を受けていました。

1年以上も続いているイスラエルとハマスの武力衝突では4万人以上の人命が失われ、未曾有の人的危機を生み出しています。そんな中、少数ではありますが、イスラエルにもパレスチナにも、愛する人を殺されながらも、悲しみや復讐心を乗り越え、赦しと和解をとおして「平和と共生」を目指そうと活動する人々がいることは確かです。今年のプロジェクに参加し、「千羽鶴」を折って原爆犠牲者の慰霊とこれからの平和を祈った若者たちも、手を携えて「平和を実現する人」に成長して欲しいと心から願っています。

引き続き皆様のご支援をお願いいたします。

井上 弘子



認定NPO法人

**聖地のこどもを支える会**

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email [ispalejpn@gmail.com](mailto:ispalejpn@gmail.com)

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

# 飼い葉桶乳児院 (ベツレヘム) からのご挨拶

シスター・ドニーズ、飼い葉桶乳児院のシスター 一同

支援者の皆様、こんにちは！ 飼い葉桶乳児院のすべての子どもたち及びシスターたちからご挨拶を申し上げます。

学校も、幼稚園も、新学年が始まりました！（注1）私たちの飼い葉桶乳児院でも新学年が始まったこの機会に、支援者の皆様方にとってこの新しい年が実り豊かな幸せな年でありますように、お祈りいたします。ガザ戦争の影響で街から一歩も動くことも出来ず、経済的に大きな損害をこうむりました。にもかかわらず、幸い私たちは子どもたちとともに素晴らしい「夏休み」を味わうことができました。それをご報告したいと思います。

毎年子どもたちは、夏の時期が始まるのを楽しみにしています。それは、毎日いつもとは違ういろいろなプログラムがたてられるからです。5月に入ると、年長さんのために、ベツレヘムから遠く離れた場所でのキャンプの準備が始まります。今年はエリコの町で2週間ものキャンプが行われました。テーマは【夏】、いろいろな楽しいアクティビティをしました。ゲームやスポーツをしたり、エリコの市営プールや遊園地へ行ったりしました。このキャンプの間中、子どもたちが沢山笑って沢山楽しんでいるのを見るのは本当に私たちにとって大きな幸せであり、励みとなりました。同時に、飼い葉桶乳児院内では、寛大な支援者のおかげで購入できた様々な大きさのビニールのプールで、幼い子どもたちが年齢に応じてそれぞれ水遊びを楽しむことができました。

夏はまた、新たな学年のために乳児院の建物を整備し、修復する時期でもあります。皆様のご支援のおかげで、沢山の子どもたちの部屋や教室、また小さいながらも運動スペースに改善が施されました。



飼い葉桶乳児院の夏休み。巨大着ぐるみキャラクターに大喜び。

それから、数日前のことですが、すでに大きくなった子どもたち（6歳）は、園内にいた子どもも通園していた子どもも、お別れをして別の施設へと巣立っていきました。（注2）

それと入れ替わりに8月に、家庭的な雰囲気の中できちんとした幼児教育が受けられるように貧しい家庭の子どもたち約20人を迎え入れました（注3）。私たちはこの新しい年を喜んでしかも落ち着いて始めようとしています。私たちの国が本当に必要としている平和が来るように祈りながら。私たちは皆様と皆様の愛するご家族のために毎日お祈りすることをお約束いたします。

主が皆様を祝福して下さいますように。

注1 イスラエルもパレスチナも新学年は9月に始まる。

注2 飼い葉桶乳児院は、生後1日目から6歳までの子どもを預かる。その後は別の施設から小学校に通う。

注3 飼い葉桶乳児院は、名誉殺人を免れた子どもだけでなく、近隣の貧困家庭の子どもも預かる。

## ヨルダン川西岸地区の現状

# パレスチナの子どもたちへの影響

ラハド・シオ（31歳 ベツレヘム在住、観光ガイド 平和の架け橋プロジェクト2024に参加）

ヨルダン川西岸地区の現状は、武装したイスラエル人入植者による暴力と日々の緊迫した状況により、特にパレスチナの子どもたちの生活に重大な影響を及ぼしています。入植者たちは時にイスラエル兵を伴っていることが多く、彼らの行動がパレスチナ人たちの日常生活に恐怖と不安の雰囲気をもたらして

ています。このような環境の中で育つ子どもたちは、特に教育と日常的な幸福という面で様々な課題や困難に直面しています。

多くのパレスチナの子どもたちは、攻撃的な入植者との遭遇を恐れて学校に行くことを怖がっています。そういった入植者が登下校中の子どもたちに対



エルサレム、ベツレヘム間の山地にできた入植地「ハル・ホマ」(壁の山という意味)。年々発展している。

して、嫌がらせや、脅迫、さらには攻撃するといった事件の報告は珍しくありません。武装した入植者は罰せられることがほとんどなく、イスラエル兵によって守られており、その存在がパレスチナの子もたちの恐怖心を煽っているのです。そのため多くのパレスチナ家族にとって、学校への通学は危険な冒険となっています。そして子どもたちは、日常的に困難を強いられる状況下にあるため、不安や嫌悪感を抱く可能性があり、このような現状が健全で支えとなる環境での学習と発達を妨げているのです。

入植者の暴力によって植え付けられた恐怖に加え、軍事衝突やロケット弾攻撃などによる心理的影響もパレスチナの子もたちがすでに抱えているトラウマに影響を及ぼしています。ベツレヘムを含む様々な地域に対する爆撃作戦や軍事行動を含む暴力の激化は、若者の心に永続的な影響を残しています。多くの子どもたちは、自分の周囲で起きる破壊を目撃し、いつミサイルで攻撃されるかわからない恐怖の中で暮らしており、そのような状況の中、彼らは日常生活に浸透する混乱と危険を理解するのに苦労しているのです。

心理的ダメージを説明するために、いとこの体験をお話します。彼は、1週間前(10月初め)にベツレヘムの上空でロケット弾を目撃しました。爆発の光景と音に圧倒され、息もできないほどの恐怖心が彼を襲い、この体験がトラウマとなりました。彼の家

族は、彼自身がこの出来事に対して自分なりに対処しようとする様子に心配しながら見守っていましたが、ありがたいことに、周りからのサポートのおかげで、彼は徐々にショックから立ち直り始めていますが、この事件は、紛争によって引き起こされる心理的ダメージに対して、子供がいかに脆弱であるかを浮き彫りにしました。

西岸地区の現状は、パレスチナの子供たちに困難な環境をもたらしています。武装した入植者による直接の暴力や、暴力におびえる生活によって植え付けられた恐怖は、子どもたちの正常な発達と教育を妨げています。これらの問題に対して、国際社会が今よりも関心を持ち、パレスチナの子もたちの安全と権利を擁護することが必要不可欠です。

パレスチナ人に限らず、安全で教育的な環境は子どもたちの健全な発達に不可欠です。こうした課題に取り組むことは、子どもたちが恐怖やトラウマから解放される上で、絶対に必要なことです。

## レバノンへ戦線拡大、強硬路線ひた走るイスラエル

村上 宏一(当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長)

イスラエルがガザ攻撃により壊滅させようとしているイスラム組織ハマスの最高幹部ハニヤ政治局長が7月31日、イランの首都テヘランで殺害されました。イランは、暗殺はイスラエルの責任だとして報復を宣言しました。イランはガザのハマスのほか、レバノン南部のイスラム教シーア派組織ヒズボラ、イエメンの反政府組織フーシという武装勢力を支援しており、これらの組織もイスラエル攻撃に加わる可能性と武器を持っています。そんな状況の中、9月17・18日にレバノンでポケベル仕掛けの爆破攻撃があり、ヒズボラ関係者など3千人を超す死傷者が出ました。ヒズボラはイスラエルによる攻撃とみて、やはり報復を宣言しました。するとイスラエルは

9月27日、レバノンの首都ベイルート近郊への爆撃でヒズボラの最高指導者ナスララ師を殺害しました。これにはイランが黙っておれず、10月1日に弾道ミサイルで報復攻撃、今度はイスラエルがどんな仕返しをするかと、緊張が高まっています。まるで相手を挑発するような指導者の殺害。ネタニヤフ政権は戦火の拡大をおおるかのように、強硬路線をひた走っています。

### 人質の死にも強硬姿勢を崩さず

ガザ情勢は、ポリオワクチン接種のための限定的な戦闘休止が実現し、停戦交渉の報道もありました。しかし、イスラエル軍による攻撃がやんだわけ

ではなく、国連が運営する学校や医療施設が度々空爆されるなどしてパレスチナ民間人の死者は4万人を超えたといわれています。ガザでの停戦・人質解放をめぐる交渉が停滞している中、8月31日に人質6人の遺体が発見されました。ハマスにより殺害されたとみられています。イスラエル国内ではネタニヤフ政権への大規模な抗議デモが起きました。9月7日のテルアビブでのデモには、主催者発表で約50万人が参加し、イスラエル史上最大といわれました。交渉が合意に達していれば人質は殺害されずにすんだらうにと、ハマス非難にも増して、交渉での妥協を拒んでいるネタニヤフ首相への非難が高まったのです。それでも首相は、停戦交渉で人質解放よりも安全保障重視の姿勢を変えていません。

レバノンでポケベル爆発により多数の死傷者が出た17日、イスラエル政府は未明の安全保障関連閣議で、戦争の目標として掲げていた「ハマスの壊滅」「人質の全員解放」「ガザ地区からの脅威の排除」の三つに、「北部住民の安全な帰還」を加えることを決めました。ガザ戦争が始まって以降、イスラエル北部はヒズボラからロケット弾などの攻撃を受けて死者も出ており、住民約6万人が疎開したといえます。付け加えられた目標は、レバノンとの国境地帯を、ヒズボラの脅威から解放して住民が戻れるようにするというものです。

## 元々ヒズボラ叩きを狙っていた

中東専門家の間には、イスラエルは元々ヒズボラ攻撃の準備を進めていたとの観測が強まっています。ポケベル仕掛けの爆殺という手の込んだ手段は、かなり前から準備を進めていたに違いなく、その観測を裏付けるものです。10・7のハマスによる奇襲攻撃は、「ミスター治安」が売りだったネタニヤフ首相にとって大きな打撃でしたが、ハマスによる残虐行為が「ホロコースト」の悪夢を呼び起こしたのを逆手にとって、ハマス根絶戦争の支持へと国民を動員しました。そしてさらに、ヒズボラ叩きに向かっていくのです。連立与党は首相支持で固まっており、レバノン国境への戦火拡大にも、首相に批判を向ける気配はありません。そもそも、なぜレバノンなのでしょう。

イスラエルは1982年、当時レバノンの首都ベイルートに本部を置いていたパレスチナ解放機構（PLO）が、そこを拠点にゲリラ活動をしているとし

てレバノンに侵攻、PLOを追い出しました。85年までに撤退したものの、イスラエルに接するレバノン南部には部隊を残し、緩衝地帯としました。これに対し南部を主な拠点とするヒズボラは、占領軍からの解放を宣言して執拗な攻撃を続けました。また、イスラエル領内へのロケット弾攻撃もあって撤兵世論が高まり、2000年5月、イスラエル軍はわずか2日で逃げるように引き揚げました。

このような苦い記憶だけでなく、ヒズボラを放っておけない理由があります。同じイスラム教シーア派のイランから支援を受けていることです。イランは、イスラエルを「聖地エルサレムを奪ったイスラム教の敵」とし、国として認めていません。イスラエルの中でも特にネタニヤフ首相は、イランを最も危険な国と名指しし、核兵器開発を進めていると見て強く警戒しています。イランを後ろ盾にしたヒズボラは、ハマスをはるかにしのぐ戦力を保持しているとみられ、ロケット弾は15万発保有かと言われるほど。そのヒズボラに対しイスラエルは、南部の対ハマス戦線で繰り広げている攻撃と同じように、北部でも激しい攻勢に出ています。

## イランが支援する「抵抗の枢軸」

イスラエルを取り巻く火種は、ほかにもあります。内戦が続くイエメンの反政府勢力フーシが、パレスチナ人民との連帯を表明し、紅海でイスラエルへ向かう商船などを攻撃してきましたが、7月19日にはイスラエルの商都テルアビブをドローンで攻撃しました。1人の死者を出したこの攻撃に対しイスラエル軍は翌日、フーシの拠点であるイエメンの港湾都市ホデイダを報復空爆、90人近くが死傷したといえます。その翌日にはフーシ側が、イスラエル南部のエイラートに、最近では9月15日、テルアビブ近郊にミサイルを発射するなどの応酬がありました。イランが支援するハマス、ヒズボラ、フーシは「抵抗の枢軸」と呼ばれ、イスラエルにとって軍事的脅威となる、という構図があります（右ページの地図参照）。

さて、ガザ停戦交渉ですが、ハマスがイスラエル軍のガザからの完全撤退を求めるのに対し、イスラエル側はガザとエジプトの境界にイスラエル軍を駐留させることが不可欠だと譲りません。ネタニヤフ首相は人質解放を最優先と考えない。ハマス側も組織が存続できるなら、おそらく民間人が犠牲にな

ろうと飢餓に苦しもうと気にしない。むしろイスラエルの印象を悪くして自分たちに有利だとみれば、妥協する気にならないでしょうから、停戦の見込みは薄いと言わざるを得ません。

### 選挙に勝つため極右も取り込む

ネタニヤフ氏に対しては、自身の首相という地位を守るために対外的な緊張状態が望ましいと考えているのではないか、という観測がしきりです。まさか自分の地位を守るために国の安全を賭けるのかと耳を疑いますが、汚職などの容疑で起訴されながら政界を生き抜いてきた彼の経歴を見ると、否定しきれません。

既に述べてきたように、ネタニヤフ首相は汚職などの容疑で起訴されている身です。首相の座を下りると、裁判で有罪になれば刑務所に入らねばなりません。しかし、2020年5月にネタニヤフ首相が起訴された時、反汚職団体が組閣を進めようとしていたネタニヤフ氏の罷免を求めて提訴したのに対し最高裁判所は、イスラエルの法律では組閣を禁じることはできない、との結論を示しました。首相の座にとどまる限り、裁判も怖くありません。史上最も右寄りといわれる現在の右派連立内閣からは、首相おろしの動きはなく、むしろ妥協するなら連立内閣を離脱するとの強硬論が出ます。この右派政権作りには、ネタニヤフ氏の策謀の歴史があります。政権を確保するためには右派と宗教勢力を糾合して国会での多数派を形成する必要があります。そこで彼は、右翼政党が乱立して議席が取れなくなるのを防ぐため、極右の政党も取り込んだ統一会派づくりに奔走したのです。

カハネというユダヤ至上主義で人種差別的言動が問題にされた政治家について、これまで何度か取り上げたことがあります。彼がつくったカハという政治団体は、その主義主張のせいで国会から締め出されました。しかし活動家が消えたわけではなく、その一人であるベングビール氏は「ユダヤの力」という政党を立ち上げ、選挙法に抵触しないような政治綱領で選挙に出ました。単独では比例投票の足切りライン（投票数の3.25%）にとうてい及ばない得票しかできなかったのですが、ネタニヤフ氏はほかの右派政党に有力閣僚を約束するなどして、無理やりベングビール氏と組ませたのです。そうやってできた統一会派「宗教シオニズム」が、22年11月の選挙で120議



席中14議席を獲得し、連立内閣の第2与党となりました。自らを支える右派で多数派を占めるため、国会で忌避され締め出された極右思想の持ち主を、なりふり構わず政権に招き入れたのです。

### 目が外に向けられている陰で

上述のように、イラン絡みの危機に目が向けられる陰で、イスラエル軍の攻撃はガザだけでなくヨルダン川西岸でも激しさを増しています。「対テロ作戦」と称する攻撃で、ガザ戦争に並行する1年間で650人を超えるパレスチナ人を殺害しました。「テロリストを倒した」と発表していますが、報道によると、子どもを含む武装組織とは何の関係もない民間人が銃撃され死亡しているといえます。国連人権高等弁務官事務所は6月4日の声明で、イスラエル軍の武力行使について「装甲車に投石するなど、ただちに命にかかわるとはいえない行為に対し、最初から致死力のある武力を使うことがよくある」と述べ、「ガザで起きている惨劇では不十分と言わんばかりに、西岸でも人々が無残に命を奪われている」と、占領政策に批判的です。

西岸パレスチナ人への脅威はイスラエル軍だけでなく、ユダヤ人入植者による襲撃もひどいもので、集団でパレスチナ人の村や住居に銃弾を撃ち込んだり火を放ったりしています。国際法に違反すると非難されながら増殖する入植地。イスラエル政府でその建設を許可する権限を持つのは、先に述べた統一会派「宗教シオニズム」の代表・スモトリッチ財務相です。自身、入居者でユダヤ至上主義者。また、既述の極右政治家で同じく入植者のベングビール国家治安相は「私と家族が西岸を自由に歩けることは、パレスチナ人がそうする権利より大事だ」と言い放つような人物で、そんな人が西岸の治安管理の責務を任されています。

欧州連合（EU）の外相に当たるボレル外交安全保障上級代表は8月下旬、パレスチナ人に対する差

別的発言で国際法に違反したとして、イスラエルの2人の閣僚に制裁を科すよう提案しました。閣僚名や発言内容は明らかにしていないものの、先に述べた2人であるのは明かです。EU外相理事会でこの提案が可決されることはないようですが、批判的な見方が強まっています。

内外に抱える火種を鎮めるよりも危機意識で政権批判をそらそうとするかのようなネタニヤフ首相は、レバノン停戦を求める国際世論に対し、「全力でヒズボラへの攻撃を続ける」と述べています。レバノンの「ガザ化」を厭わぬ政権のありように、さらなる紛争拡大への懸念が強まります。

## 平和を願うオルガンコンサート 大成功!

聖地の平和を心から願う私たち聖地巡礼者(道の会)の有志は、NPO法人「聖地の子どもを支える会」による「ガザ緊急支援」「教育支援」「平和の架け橋プロジェクト」などの活動を支援すべく、聖地特別管区の首席オルガニスト、ヤクープ・ガザウィ氏にパイプオルガンの演

奏をお願いしました。5月から9月にわたり「平和を願うパイプオルガンの響き」と題するコンサートを九州、関西、首都圏の計12箇所で開催できました。会場を提供して下さった、福音ルーテル博多教会、熊本カトリック手取教会、大阪聖公会川口教会、神戸カトリック中央教会、京都カトリック河原町教会、日本基督教団番町教会、聖公会聖マーガレット教会、聖公会聖オルバン教会、立正佼成会大聖堂、日本基督教団横浜指路教会、カトリック山手教会(奏者の体調不良で中止となり、申し訳ありませんでした)、カトリック藤が丘教会に、厚く御礼申し上げます。



立正佼成会大聖堂にて。スタンドグラスからの夕日に照らされて。



ほぼ満席の大聖堂に広がるパイプオルガンの響き。

各会場に沢山の方がお見えになり、望外のご支援もいただきました。本当にありがとうございました。いただいた中からオルガン奏者へのお礼と必要経費を差し引き、約百万円をNPO法人に寄付することができました。このたびご協力くださったすべての方々に心より御礼申し上げます!

イスラエルとパレスチナの平和を願う会  
代表 向井純子

皆様、心から感謝いたします。ご寄付は大切に聖地の人々への支援に使わせていただきます。

認定NPO法人 聖地の子どもを支える会  
理事長 井上弘子

## 支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- \* 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
- \* 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
- \* いつからでも、いくらからでも簡単に始められます!

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**  
または **042-636-9218** (中山)

## 遺贈・相続寄付をご検討の方へ

当法人では遺産・相続財産のご寄付も、ありがたく頂戴しております。将来、平和の担い手となる聖地の子どもたちの教育支援や国際交流事業などの活動に使わせていただきます。

詳しくは当法人事務局までお問い合わせください。

**TEL.03-6908-6571**  
**TEL.090-6538-3255**(井上)

## 総括

井上弘子 村上宏一

### はじめに

「聖地のこどもを支える会」が2005年から続けてきた、イスラエルとパレスチナの若者を日本に招いて交流を図る「平和の架け橋プロジェクト」は昨年8月、コロナ禍による中断から4年ぶりの復活を果たした。イスラエル世論の右傾化が強まり、パレスチナ側との緊張が高まる中、プロジェクトの対話にも、ごちなささが反映した。それでも育まれた友情がやがては芽を出す種となって、参加者がそれぞれの故郷へ帰ってほっとしたのも束の間、10月7日のイスラム教原理主義組織ハマスによる奇襲攻撃が起きた。この「10・7」とイスラエル軍によるガザへの報復攻撃という戦争状態には、間もなく1年になろうというのに終わりが見えず、ガザ緊急支援事業も手掛けることになったため、2024年度のプロジェクトを実施するかどうかの話し合いは年を越した。事業運営のための助成金の申請期限が1月中旬に迫ったことからようやく、「やると仮定して」と議論を進め、実施の方針が固まったのは5月になってだった。

これまでのプロジェクトでは、イスラエル、パレスチナ、日本からの新規参加者を迎え、国境を越えた交流を通じて平和への理解を深める機会を提供してきた。しかし、現地の紛争状況は未だに厳しく、新規に募集して参加者を選ぶ余裕はないとして今回は、これまでのプロジェクト参加者に呼びかけ、経験を踏まえた、より深いレベルでの対話を目指すことにした。

対話のプロセスと成果を日本国内に広く伝えるため、シンポジウムを開催し、多くの人々との共感と理解を得る場を設けることも目指したが、あいにくの台風でリモートでの開催となった。それでも、2週間という短い時間ではあっても共に過ごし、初めて直しに接し、互いに受け入れ合えるのかという不安を乗り越えて語り合った成果を、メッセージに込めて発表した。それを将来に生かしたいという思いを添えて。



8月8日原爆殉難者慰霊祭でキャンドルサービスの練習、長崎の若者とともに。

### プロジェクト準備

#### ●実施の決断

今年のプロジェクトは、実施するかどうかの検討から始まった。10・7に端を発した戦争が続いている中で、「人の行き来をはじめとする活動が可能なのか」「イスラエル・パレスチナ双方が、互いを敵とみなして相手への怒りや憎悪を抱いていそうな今、和解を語り合う活動に応募しようという若者がいるだろうか」などの懸念があった。しかし、こんな時だからこそ、ささやかでも平和の種をまこうと続けてきた架け橋プロジェクトを絶やしてはならないとして、実施を決めた。

#### ●参加者の募集

現地での参加者募集はこれまで、誰でもアクセスできるようなSNSなどを使って公募したり、過去のプロジェクト参加者に友達の友達を誘ってもらったりしていた。しかし今年は、ネットなどに「平和の使者を募る」のような情報が流れると、どんな攻撃を受けるかわからないという心配があった。表現の自由が強調されるイスラエルでも、軍によるガザへの攻撃に批判的な報道をすると威嚇を受けたり、占領下にいるパレスチナ人がガザへの連帯を表明すると拘束されたりした。パレスチナ側にも、イスラエルとの平和を語ると同胞から危害を加えられかねないという不安があった。このため、過去の参加者に直接声をかける方式で参加者を募ったが、連絡の取れた人達からは、勤務や学業の都合、周囲の反対などの理由で断念を伝えてくる例が相次ぎ、結局5人だけとなった。ようやく参加者が固まったのは、8月上旬のプロジェ

クト開始の1カ月前だった。

日本人の参加者も、3名がほぼ同時期に決まった。いずれも架け橋プロジェクトかスタディ・ツアーの交流プロジェクト経験者で、お互いに初めて会うイスラエル・パレスチナ双方の若者の貴重な仲介役を果たすことになった。中でも小学生の時以来3回目の参加となる中山喜祈君は、13歳の年少パートナーとしてみんなの心をほぐしてくれた。

#### ●協賛・後援など

いつものようにヨハネ・パウロ二世財団の協賛、国際協力機構（JICA）の後援を得たほか、長崎では宿泊から協力団体などとの連絡・調整などで、カトリック長崎大司教区から大きなお力添えをいただいた。在日イスラエル大使館、パレスチナ代表部の後援は、今回はなかった。

#### ●プログラム作り

プロジェクト実施の決定が遅れたことで、プログラムの検討が本格化したのも5月以降。戦争・紛争を改めて考える機会にする意味で今回も被爆地を訪れることにし、経費の面などを考慮して長崎に決まった。宿所の提供やプログラムの作成、原爆の日の祈念式典参加、被爆者や宗教団体との連絡などで、長崎大司教区の中村満神父様には特にお世話になった。

#### ●費用

円安の影響は相変わらずで、特に航空運賃の負担が重かった一方、参加費は上げられず、当法人の持ち出しが大きくなった。支援者のご寄付に支えられたほか、エルサレムの現地スタッフであるヤクープによるチャリティーオルガンコンサートを九州、関西、関東十数カ所で開催して寄付を募った。また、助成金を申請した三菱UFJ国際財団からは、プロジェクトの内容が予定通りいなくても、実施できたものを報告してくれれば助成の対象と認めることに変わりはないと、柔軟な対応をしていただいた。

#### ●事前研修

本来なら来日前に集まって、最初の触れ合いをしてもらうのが望ましいが、戦争状態でなかった去年（前回のプロジェクト時）でさえ、パレスチナ人は自治区内の移動も難しいというのでリモート会合となった。

ましてや今年は戦争に終わりが見えず、イスラエルとパレスチナの若者が公の場で顔を合わせることなど考えられなかった。結局、現地出発前に1回だけリモートで顔合わせができた。

## プロジェクト実施

### 田平での活動

8月4日（日）～7日（水）朝

#### ●波乱の旅立ち

プロジェクトはまず、参加者が無事日本に来られるかどうかの心配から始まった。折しも、イスラエルがハマスの最高幹部をイランの首都滞在中に殺害したとされる事件でイランの報復が心配されるということで、イスラエルを3日朝に立つ便がキャンセルとなった。代替便をなんとか見つけたものの出発は遅れに遅れ、イスラエル人2人はベングリオン空港で何時間も待たされた。それでもあきらめずに出発したものの、成田から集合場所である福岡空港への乗り継ぎ便に間に合わず、長崎空港に向かう便をつかまえて、4日深夜にようやく長崎県田平町の宿所に着いた。

そこには、先に日本へ来ることができたパレスチナ人や日本人の参加者らが心配しながら待っており、図らずも遅れた2人を歓迎する空気ができていた。イスラエルから来た2人は後に、温かく迎えられて感激したと述懐している。

#### ●合宿生活

宿所にはカトリック長崎大司教区のお世話で田平教会の信徒会館が宛てられた。若者たちは男女それぞれ床にごろ寝の合宿生活。7日から宿所は長崎市のお告げのマリア修道会本部に移った。



アイスブレイキング：国籍を忘れてこどものように遊ぶ。



共同生活の最初の数日間は、言葉遊びや野外活動、地元の子どもらとの交流に費やされた。活動の様子を追っていたNHKのニュース番組「おはよう日本」の密着取材班は、和平を話し合うはずなのにクイズごっこみたいなお遊びや山歩き、海水浴などが続いて「本番」はいつ始まるのだろうと思ったかもしれない。これらはアイスブレイキング、つまり「氷を融かす」という意味で、初対面からお互いの緊張感をときほぐすための工夫。生身の接触で、互いの個性や人柄を知る機会となる。イスラエル人、パレスチナ人はいずれも、憎しみや恨みを抱いているかもしれない相手とどうやって向き合うのかと不安を抱えていたが、緑豊かな高原で共に歩いたり、海と一緒に泳いだり、さらに温泉で裸の付き合いをしたりして自然に話ができるようになったと語った。こうして培われた関係が、後にそれぞれの紛争体験や苦しい思いを語り合う時に、憎しみをぶつかけたり本音を隠したりすることなく、意見を交わすことにつながった。



暇ができると折り鶴。だんだん上手になる。

### ●地元との交流

小学生と共いうちわや折り鶴を作ったほか、中学生とは習字や生け花に挑戦。来日組は、初めて書いた日本語の文字を記念に持ち帰った。また折り鶴はその後、「千羽鶴」を目指してみんなで折り続けた。

## 長崎市での活動

8月7日(水)午後～13日(火)朝

### ●原爆を知る

始めに、ジャーナリストの畠山博幸さんから長崎における平和活動全般についての話を聴いた。

被爆者の増川雅一さん(83)は、4歳のときに被爆し、79年前のことだが今も放射能の影響で後遺症に苦しんでいると語った(注)。それでも「武器で反撃し



白血病の権威、朝長万左男先生から放射能の恐ろしさについてレクチャーを受ける。



長崎原爆資料館を見学。

ないこと」を宣言する核兵器禁止条約に希望を託したいという。そして「戦争をしている双方の人が一緒にやって来ると聞いてうれしかった。こういう動きが戦争放棄につながっていく」と語ったその言葉に、若者たちは感動した。

(注) 原爆による白血病の研究を続ける朝長万左男・長崎大学名誉教授からは、原爆を生き残った人々がいつ癌を発症するかわからない恐怖を抱いている、との話を伺った。

原爆資料館の見学では、悲惨な映像や遺品を正視できなかったとの声や、がれきの光景にガザの惨状を連想したとの感想があった。

永井隆博士の「如己堂」(注)では、被爆者でありながら、あくまで隣人愛による真の平和を希求し続けた博士の生き様に感銘を受けた。

(注) 「己の如く隣人を愛せよ」という聖書の1節から命名された。

恵の丘 長崎原爆ホームを訪れ、子どもの頃に被爆された築地重信さんの体験談を聞いた。築地さんは被爆後何年も経ってから、脳裏にありありと残っている被爆の風景を絵画として残された。



8月9日長崎平和式典。3カ国の若者が肩を並べて平和を祈る。



8月8日原爆殉難者慰霊祭での献花。

### ●原爆殉難者慰霊祭

長崎宗教者懇話会主催で8月8日に開かれ、イスラエル・パレスチナの若者たちも地元の若者たちに混じってキャンドルサービスに参加、とても印象的で感激したという。懇話会事務局長の出射優行氏に大変お世話になった。

### ●長崎平和祈念式典

原爆を落とされた8月9日、長崎市主催の祈念式典は、いつもは招待している駐日イスラエル大使を招かなかったことで米大使などがボイコットするという政治ショー的な動きがあった。そんな中、イスラエルとパレスチナ双方の若者が参加した「架け橋プロジェクト」がマスコミの注目を浴びることになり、参加者のインタビューがNHKの全国ニュースで流れるという一幕もあった。

### ●平和祈願祭とたいまつ行列

長崎大司教区主催の平和祈願祭にも出席。ミサ後に「被爆のマリア」\*を担いで平和公園まで歩きたいまつ行列は恒例行事だが、プロジェクト参加者からクリスチャン3人が担ぎ手として参加。

\*戦前、浦上教会の祭壇に飾られていた木彫のマリア像。原爆により壊滅した教会の焼け跡から頭部のみが発見された。原爆の恐ろしさを身をもって訴える「被爆のマリア」として、ユネスコ世界遺産の候補にもなった。



「被爆のマリア像」を担いだたいまつ行列が浦上天主堂を出発。

### ●高校生との対話

核兵器廃絶と平和を求めて「一万人署名活動」や国連への「平和大使」派遣を続けている高校生との交流では、長崎市民が「リベンジ（復讐）より平和追求」の道を選べたのは何故かが一つのテーマとなった。これは、被爆者に話を聞いたときにもイスラエル・パレスチナの若者の関心を引いたことだった。リベンジの応酬を続けているイスラエルとパレスチナの歴史を思えば、追求したいテーマであろう。被爆者から聞かされた「もう十分に苦しんだ」という言葉が、和解へとつなげるヒントの一つになるだろうか。

### ●平和コンサート

11日午後、浦上天主堂でヤクープによるパイプオルガンコンサートを開催した後、長崎市民との対話集会。若者たちは次のような思いを語った。

・大人たちが「そのうち平和になる」という約束を守らなかったの、私たちが憎しみや怒りに直面することになった。次の世代に悲惨さを経験させないような教育が必要。

・日本のように普通に暮らせるのがうらやましい。私たちには単純なことが当たり前でない日常がある。

・常に戦争があるという状況を止める努力をしない政治。イスラエル人もパレスチナ人も普通の人々は、戦争はこりこりだと思っていることを、交流の中でわかり合えた。

・何度か来日して交流する機会を得て、他者を受け入れることの大切さを学んだ。

### ●分かち合い

少しずつ打ち解け合い、宿所でのミーティングを重ねる中で、紛争についてそれぞれの知識や原爆とのつながりで思うことなどが語られた。ここでも、自分たちが受けた被害を訴えるだけでなく、平和を願う長崎市民のことに心が向かった。そして自分たちの問題意識として「壁をなくしてお互いが見えるようにしたい」「何があったか、何をされたかの過去、それも自分たちの被害だけを語るのではなく、相手側のこと、相手は何を望むのかを語るべきだ」という意見も交わされた。

### ●千羽鶴

田平・長崎での活動を終えたグループは13日の



絆ゲーム、この2週間で結ばれた友情の絆の証し。

朝、お世話になった「お告げのマリア修道会」本部のシスター方に感謝しつつ別れを告げ、長崎空港に向かう前に、爆心地に立ち寄った。前述のみんなで作った「千羽鶴」を、原爆犠牲者慰霊と核兵器のない平和な世界実現の祈りを込めて捧げるためだった。田平で小学生たちから折り方を教わり、またヒロシマの「サダコ」の話も聞いて感激した参加者たちが、「千羽」をめざして暇を見つけては折り続け、とうとう長崎出発前夜に完成したものである。

### ●感謝

田平を含め9泊10日の長崎滞在では、田平教会とお告げのマリア修道会のボランティアやシスター方に合宿生活を支えていただいた。また中濱護、小淵光弘のお二人にはバスのドライバーとして滞在期間を通じて各目的地への移動でお世話になりっぱなしだった。皆様に深い感謝の意をお伝えしたい。



お告げのマリア修道会のシスター方と。

### 東京での活動

8月13日午前～17日(土)午前

### ●話し合い

長崎空港を発って次の宿泊地、JICA 東京国際センターに到着したのは午後4時過ぎ。若い参加者たちは、「憧れの大都市トウキョウ」訪問を楽しみにしていたので、チェックインを済ませ、JICAの宿泊規則の説明もそこそこに、新宿の繁華街へ出て行った。その後も、夕方17時から23時まで毎晩自由時間を楽しんだ。

しかし、話し合いは真剣であった。長崎での平和と戦争に関する学びをもとに、それぞれの紛争体験の苦しみを分かち合い、さらに絆を深めていった。「ガザで兵士として、命令に従い任務を遂行しなければならなかった時は、本当に苦しかった!上官に

『相手はただのありんこと思え!』と言われた」と涙ながらに話すイスラエル人、「自分たちは毎日チェックポイントや街中での検問で、イスラエル兵から耐えがたい屈辱を受けて、とても憎かった。しかし、相手にもそうして苦しんでいる人がいるんだと知った!」と話すパレスチナ人、などなど。この分かち合いの最後には、互いに「友」として、熱いハグを交わした。その後は、共同で「平和のメッセージ」を作成、また各自の「プロジェクトのまとめ」をした。

### ●絆ゲーム

最後のアクティビティとして、互いに友だちになれたことの感謝と喜びを表す「絆(きずな)ゲーム」を行った。互いの間に結ばれた絆を象徴するために、まず参加者は円陣を作って座り、この2週間の合宿生活をとおして感謝したい、評価したい、謝りたいなどと思った相手に、その理由を言いながら、荷造り用のビニール紐のプロットを投げるといふもの。紐はその都度投げられた人のイスに固定して次の人に投げるので、最後にはクモの巣のようになり、互いの心の絆を形で表すものになる。

### ●シンポジウム

16日に東京・四ツ谷の聖イグナチオ教会で予定していたシンポジウムは、台風の影響でオンライン形式に切り替えられた。この変更は結果的に良かった。天候に関係なく、しかも遠方の人も参加出来たので、想定外の数の支援者やメディア関係の方々に聴いていただけたからだ。プロジェクトを終えるにあたって参加者それぞれが語る思いに、多くの支援者らが耳を傾けた。

個々のメッセージの中でイスラエル、パレスチナからの参加者は、プロジェクトの成果として、相手側も普通の人々は平和を望んでいるのだと知ることができたことをあげた。そして、互いに友達になれば平和を実現することが可能だとの思いを抱いたという。日本人参加者からは、紛争の実情や背景を知らせるべきと思ったこと、紛争の当事者たちが共に参加したのはすごいことであり、友情が生まれたのをうれしく思ったことなどが語られた。



国籍、年齢関係なく！一つになった喜び。

質疑では、それぞれが地元へ戻った後、同胞に和平を説いたり、「日本で向こう側の人間と友達になった」と話すのは難しいのでは？ という質問があった。それに対して、今和平を語るのは確かに難しいが、信じることを堂々と話したいとか、「相手と会ったよ」と伝えることから始めたいという答えがあった。また、プロジェクトに参加しようと思ったのは何故かという質問には、他者を知ること・他者の話を聞くことが大切だと思ったから、という答えが目立った。そして、背景が違うから意見が異なるのは当然

だが、人間として語り合うことにより友人として受け入れるようになった、という言葉が聞けた。

## 終わりに

本プロジェクトの約 20 年の歴史上最も厳しい現実の中で実施した今年の「平和の架け橋プロジェクト」も、中村神父様をはじめ大勢の方々の惜しみないご協力のおかげで、何とか無事に終わることが出来た。参加者たちは、たとえ相手が敵対国の者であっても、2週間の共同生活と分かち合いの中で、同じ人間として向き合い、互いに理解し合えば、「平和共存」は可能だという「希望」を見出すことが出来た。彼らの心に生まれたこの光は、闇のような苦しい現実の中ではどんなに小さく見えても、一步一步、手を携えて歩めば、必ず互いに尊重し合う「共生」への道を示してくれると信じている。

# 平和のメッセージ

## 全員で作ったメッセージ

私たちにとっての平和とは、互いに相手を受け入れ合い、心の平穏を感じることを意味します。それは、家族や友人と寝食を共にし、互いに助け合い、人間らしく生き生きと交流することです。

現在、今この時もイスラエルとパレスチナでは戦争が続いています。このプロジェクトが始まる前は、イスラエルとパレスチナの若者たちは、この戦争によって生まれた怒りや憎悪の感情を相手が抱いているのではないかと不安を感じていました。しかし、田平や長崎の町で美しい自然に触れ、人々が平和に対して真摯に向き合う姿を目の当たりにすることで、その不安は徐々に消えていきました。また、日々共に話し合うことで、私たちは一人の若者として、国境を越えた友情を築くことができました。

東京では、長崎で築いた固い絆と友情を基に、平和な関係を築くことができました。それができたのは、相手の抱く感情や思いを否定するのではなく、相手の話にくい事情にも耳を傾け、広い心でそれを受け止めたから、そして日々共に過ごして議論を重ねたからです。

平和の実現は一気にできるものではありません。一步一步、まず私たち自身の内側から、そして隣人へ、町へ、できれば最後には国全体に、そして世界へと広げていくのです。私たちは平和のメッセンジャーとして、国籍や人種、年齢、宗教、男女の違いを超えて受容と対話の実現を目指します。

私たちは、状況がどのように複雑でも、このプロジェクトで培われたような友情こそが平和を実現できるのだと信じます。闇を克服するには光を増やさねばならない。この単純な真実を理解しない限り、光が闇に打ち勝つことはできないのです。

## 一人一人のメッセージ

### タマル・ダニエル（イスラエル人・27歳）

私の人生にはいつも「戦争」の2文字がありました。昨年から続いている戦争により、沢山の人命が失われ、街が破壊されました。これから私の祖国はどのようになるのか、先が見えません。私は、現在の政府を信用できません。なぜなら誰も私たち市民のことを気にしておらず、戦争を止める努力をしていないと思うからです。



その結果、罪のない人々が毎日命を落としています。私は、これらを止めるには平和を実現するしかないし、実現することはできると信じています。

今のような状況の中でこのプロジェクトに参加し、初めてパレスチナ人の友人に出会えたことをとても嬉しく思います。参加する前は、パレスチナ人に会ったら非難され、攻撃されるのではないかと心配でした。ところが出会った当初から、信じられないような温かい歓迎を受けました。そしてプロジェクトを通して、パレスチナ人も私たちイスラエル人と同じように、戦争はもうこりごりだと思い、平和に暮らしたいと思っていると知ることができたことは、このプロジェクトで学んだ一番大きなことだと思います。

共同生活の日々を通じて、良い雰囲気は続きました。共通の趣味や共通の夢があることを発見しましたし、互いに寛容であり敬意をもって接しました。今思うのは、自分がパレスチナ人の生活についていかに無知だったかということです。今回の経験と、交流の中で得た知識を、できるだけ多くの周囲の人たちと分かち合いたいと思います。そして、隣人であるパレスチナ人とのつながりを広げ、共同のイベントに参加して、このプロジェクトで共に灯した明かりを大きなものになりたいと思います。

私の願いは、いつの日か、イスラエル人とパレスチナ人が一緒に旅行をし、共に笑ったり泣いたりすることが当たり前になることです。血で血を洗う争いをなくし、美しい祖国を守り後世につないでいくべきです。私が生きている間にそれが実現されることを心から願っています。

### サハル・マスラウィ (イスラエル人・23 歳)

大人は子どもたちに、大きくなる頃には戦争は終わっていると何年も伝えてきました。自分がまだ幼いころ、先人たちは心から平和を願い、それを実現しようとしているのだと信じ、18歳になる頃までには平和が訪れるものと思っていました。しかし、月日が流れていく中で、それはウソだったと思い知らされました。

イスラエルでは、高校が終わると男女ともに徴兵に行かなければなりません。去年まで軍隊にいた際



に、大人たちが平和を実現するという約束を放棄した結果がのしかかってきました。いま私たち若い世代は、この重荷を背負わなくてははいけません。何も達成されていないせいでひどいことが起き、私たち若者が戦場に行かされ、身をもって人の憎しみや負の感情を体験しなければならなかったのです。自分の子どもたちには、私の悲惨な経験を絶対にしてほしくありません。そして、未来を変える力が私たちにはあると信じています。

このプロジェクトのおかげで、イスラエル、パレスチナ双方の若者が出会い友情を築くことができました。この2週間の経験でお互いのことを深く知ることができ、人間は生まれた場所、環境に関係なく、一人の人間として相手を受け入れ、繋がることのできることを確信しました。私たちは、心の底から変わらなければいけません。もし、このまま紛争が続けば、私たちの子どもやまたその子どもたちは、今よりもっと悲惨な経験をすることになるでしょう。

最後に皆さんにお願いしたいのは、イスラエル・パレスチナ間で起きている紛争は沢山の要因が絡み合っており、とても複雑だということです。お互い、沢山のモノ、人を失いました。この現状を変えるには、忍耐と寛容そして謙虚さをもって、互いに理解し合うことが必要だと私は思います。

### ラハド・シオ (パレスチナ人・31 歳)

私は、希望、愛、共存の力を強く信じています。紛争と分裂が起きているこの世界において、私は人間性を尊重し合える平和を望んでいます。

このプロジェクトでは、初めから政治や紛争の話をするのではなく、参加者同士たわいもない話をしたり、お互いの話に耳を傾けたりしていく中で、お互いの距離が近くなっていくことが目に見えて分かりました。私は、様々な話し合いの中で沢山のことを学びました。このプロジェクトでの経験は、今までの人生の中で体験したことがないような経験を沢山することができました。私は、このプロジェクトでの経験から、イスラエル、パレスチナの人々は平和に暮らすべきであり、その平和が実現できるように私なりの「平和の架け



橋」を実現したいと強く思うようになりました。

長崎を訪れた際、長崎の街の豊かな歴史と回復力にとっても感動しました。第二次世界大戦時における原爆投下は、平和公園や、原爆資料館で見られるように、長崎の街に永続的な影響を与えました。これらの場所は、核戦争がどのような結果をもたらすかを強く思い起こさせるものでした。

現在イスラエル人とパレスチナ人の間にできている溝は深まっていくばかりです。しかし、私たちがお互いに手を取り合い、共存と平和を強く願うことで、イスラエル人、パレスチナ人との間の平和は実現されると私は思います。

### ワシム・アラミ (パレスチナ人・27 歳)

私は「平和」とは何かが分からなくなることが、よくあります。「平和」とは心が平穏なことなののでしょうか、それとも何かもっと深いものなのでしょう。そもそも私は、本当の平和というものを経験したことがあるのでしょうか？



平和には沢山の解釈があり、例えば戦争がないこと、安全な環境の中で家族、友人と共にいられること、自分の好きなことができること、あるいは次に何が起きるか心配せずに日常を送れることなど、様々でしょう。私は旅行などで日本やヨーロッパを訪れると、そこにある平穏な暮らしがすごく羨ましいと思うことがあります。彼らの暮らしは、たとえ心配事を抱えても、私が感じている負の感情とは違うと思います。私も日本やヨーロッパに暮らしている人々のように、自分の感情を思いっきり表現できるような毎日を過ごせたらと思います。

このプロジェクトのメンバーと一緒に長崎を訪れ、東京で話し合いをした経験の中で、真の「平和」とはなかなか定義できないものだとして改めて実感させられました。原爆が落とされた歴史やミサイル攻撃に怯える日々など、人々は想像もつかないほどの辛い経験をしています。罪のない人々が毎日のように死んでいくのを見るなんて耐えられません。楽しいことを楽しいと思えるような平穏な暮らしがしたいという、こんな単純なことが叶わないなんて。

私たちは、生きている限り何かを他者に伝え、変化を起こすために生まれてきたと、私は思います。そして生きていく限り、死は必ず訪れます。私は、この世を去る時に悲しみに暮れないでいられることが大事だと思います。

私の目標は、この世に平和を、愛を、そして理解し合う心を広めることです。小さな一歩もいつしか実を結びます。だから私は、必ず変化が訪れると信じて平和のメッセージを発信し続けます。

### クレール・ガザウィ (パレスチナ人=イスラエル国籍・32 歳)

私は今までに4回日本にきたことがあります。最初に訪れた時は、東日本大震災の被災地でパレスチナ人、イスラエル人、日本人のみんなでボランティア活動をしました。活動を通して、自然災害は人災よりも悲惨なものだということを学びました。なぜなら戦争のような人災は話し合いで解決をしようと思えばできますが、自然とは話し合うことができないからです。



2回目の参加で被災地を訪れた時は、街の復興を願うための花を植える活動に参加しました。当時の私は、日本人はどうしてこんな残酷な現実を受け止め復興へと歩みを進めていけるのだろうかと思いました。そんな時に、イスラエル人、パレスチナ人、日本人が一つのグループとなって楽しそうに活動しているのを見た一人の被災者の方が、「みんなが楽しそうにしているのを見るのがとても嬉しい」と言ってくださいました。その言葉で、相手を許す心を持ち、受け入れることが幸せへの第一歩であることに気づかされました。

3回目に参加した時は老人ホームに行き、入居されている方々と一緒に踊り、日本食を振る舞っていただきました。私たちも自国の料理を振る舞いました。文化交流はいつも楽しく、自国を代表して伝えられることを誇りに思います。この時も新しいことを学びました。それは、どんなに私たちと日本人が違っていても対話をすることができる、ということです。私は日本語は話せないのに、笑顔で彼らの話を聞くことしかできませんでした。愛を持って相手と接すれば分かり合うことができました。

現在、イスラエル・パレスチナ間で起きている紛争で様々な問題が起きている中でこのプロジェクトに参加することに正直、不安な気持ちはありました。しかし、プロジェクトに参加して平和実現のために努めたいという気持ちは変わりませんでした。イスラエル、パレスチナの紛争を解決するのは簡単ではありませんが、不可能でもありません。お互いに平和を願い受け入れ合えば、友達になれます。

イスラエル人の友人を得たこのプロジェクトを通して、改めて思いました。現在の紛争にはまだ解決への希望はあり、いつの日か平和を実現できると。

### 金森早紀 (日本人・28歳)

現在起きているイスラエル・パレスチナ間での紛争により今年のプロジェクトは本当に実行できるのだろうか、始まる前は不安でした。結果、無事に終えることができ、まずは嬉しく思います。

長崎での被爆者の方々のお話は、ことばで尽かせないほど凄絶な体験だったのだろうと想像することしかできません。しかし、戦争を知らない私たち日本人はこの体験を後世に伝えていき、世界が核を使わないように、自分の子ども、またその子どもたちが苦しまないように、核の恐ろしさを世界に伝えていく義務があると思います。

イスラエル・パレスチナの青年が、現在も続いている紛争に対してどう思っているのかを実際に聞いたことは、とても良い経験になりました。以前参加した時に、「あまり話したくない」と言っていた参加者もいたので、今年は気持ちをシェアしてくれるのが不安でしたが、それぞれに思うことはあるけれど、イスラエル人・パレスチナ人双方が強く心から願っているの「平和」であり、それは誰しもが共通して持っている願いだということに気付かされました。当たり前のことかもしれませんが、真に平和を願うことは、簡単ではないと思います。ほんの些細なことで相手を嫌いになることは簡単です。同じ人種同士でも喧嘩をするのに、歴史的に見てずっといがみ合っている者同士が平和を願うことは難しいと私は思い



ます。それでも私たち一人一人がこのプロジェクトで学んだことを発信することで、平和を願う気持ちが蜘蛛の巣のように広がっていけばと思います。

まずは小さな一歩がなければ何も始まりません。そのために私自身は、私の体験を友人と分かち合い、ソーシャルメディアでの発信をし、長年の目標である国際機関での仕事をするという目標を達成しようと改めて強く思いました。

### 清原崇 (日本人・23歳)

二年前の夏、このNPOのスタディ・ツアーでイスラエルとパレスチナの地に行った際、両国の複雑な歴史と深い溝を前に無力感を覚え、1人の日本人として平和の実現に関与することがいかに困難であるかを痛感しました。それ以降、このNPOに関わり続けてきましたが、戦時下でも自分にできることや学べることがあれば、という思いで今回のプロジェクトに参加しました。

この期間を通して、紛争のない世界の実現は困難であることを痛感した一方、より良い世界を築くための希望はあると感じました。まず、8月9日の長崎平和祈念式典において、イスラエルを含む6カ国の駐日大使が欠席した中で、私たちのグループからイスラエルとパレスチナ双方の若者が参加したという事実を、私は誇らしく思います。政治という枠を超えて、イスラエルとパレスチナの若者が国境を越えた友情で繋がっていることを示すことができたのではないかと考えています。

一方で、8月8日の長崎原爆殉難者慰霊祭に参加した際、「なぜお互いに仲良くできないのか、自分が悪いことをしてもなぜ素直に謝ることができないのか」といった小学生の純粋で素直な疑問を聞き、不幸にも悲惨な歴史を繰り返す残酷な大人たちとの対比に強い感情を覚えました。

何千年もの人類の歴史を振り返ると、今後も戦争が完全になくなることはないかもしれません。しかし、このプロジェクトで証明できたように、憎しみの感情にとらわれるのではなく、相手の立場を理解しようとする豊かな想像力を持って、許し理解し合うことは可能だと信じています。



「目には目を、歯には歯を」ではなく、立場の違う人々への理解を深める想像力を大切にし、今後の自分の人生にも活かしていきたいと思います。また、ここで築いたイスラエルやパレスチナの友人たちとは、今後も生涯にわたって交流を続けたいと考えています。

### 中山喜祈 (日本人・13歳)

五年前の小学三年生の時に初めてこのプロジェクトに参加しました。とてもよい経験でしたが、その時はイスラエルとパレスチナの紛争について、ほとんど知りませんでした。なので、当時は、このプロジェクトの本質が見えていませんでした。



一年前の夏、二回目のプロジェクト参加の時には広島に行き、そこで初めて被爆地に足を運びました。そこでも、とてもいい体験ができました。しかし、原爆についてあまり身近だとは感じていませんでした。しかし、今年、このプロジェクトで感じたことは、一年前とも五年前とも違っていました。初めての長崎で、いろいろなところをめぐり、いろいろなことを感じる中で、原爆、戦争についても学びました。長崎は夜景がとてもきれいなことで有名ですが、僕はその美しい夜景が、原爆によって一瞬にして真っ暗になってしまった景色を思い浮かべた時、とても恐ろしくなりました。原爆は街を破壊するだけではなく、精神的にも人を攻撃するのだと知りました。きっかけが何かは分かりませんが、この長崎の体験や自然をとおして、遠い存在だった原爆が、自分の方にグッと引き寄せられたように感じました。

今回、このプロジェクトでも、去年以上に参加者のみんなと仲良くなり、参加者同士も友情を繋ぐことができました。僕は、それが本当に嬉しいです。なぜなら、平和を実現するためにこのプロジェクトがしているのは、戦争を撲滅することではなく、互いに敵同士だった人々が、かけがえのない友情を築くことだからです。そういう意味では、このプロジェクトは大成功していると思います。このプロジェクトが平和の実現への一歩だと確信しています。

### 長崎の活動を振り返って

田平教会主任司祭 中村 満



認定 NPO 法人「聖地のこどもを支える会」主催の「平和の架け橋プロジェクト 2024」が、8月4日から13日まで長崎を会場にして行われた。平戸市のカトリック田平教会の施設である信徒会館を三泊四日で使用させていただき、その後、長崎市に移動し、お告げのマリア修道会本部の施設で五泊六日過ごさせていただいた。

田平町を選んだのは、自然環境に恵まれ何のストレスも感じずに静かに過ごすことができ、戦時下の国からの参加者には適しているとの考えからであった。

プロジェクト一日目。一行は4日の午後2時頃、福岡空港着。2名のイスラエル人が、飛行機の遅れで同行していないというトラブルもあったが、空港を後にし、夕刻、田平に到着。長旅の疲れを癒すためシャワーに入り、夕食。食後、注意事項、起床時間などを伝え、男性は一階のホールでの雑魚寝、女性は二階の畳の間での雑魚寝となった。雑魚寝はお互いを知るうえで良い体験であったらう。

二日目の8月5日は交流の日と題し、午前中は、三か国の青年たちと田平教会の小学生との交流を企画。日本文化を体験してもらうため、団扇に好きな絵や文字を書いたり折り鶴を作る作業を小学生と協働。子どもたちに折り方を教わりながら千羽鶴を作り、また、マジックペンを使って団扇に名前や得意の絵を描いた。青年たちも子供たちも和気あいあいと取り組む姿が印象的だった。

午後は、昼食後、リフレッシュのため川内峠という景勝地での散策を一時間ほど実施。二時間の予定だったが、猛暑のため早めに切り上げた。その後、施設使用のお礼も兼ねて、信徒会館玄関前の掃き掃除。ホースを使っての水洗いを共同で行った。夕刻、信徒会館にはシャワーが一つしかないためホテルの温泉に出かけた。平戸大橋と平戸島が一望できる地に建つホテルでの温泉入浴は、記憶に残る体験となっただろうと推測している。特に、露天風呂での裸の付き合いは貴重なものとなったにちがいない。8月6日。この日、午前中は習字と生け花の日本文化体験。習字を習っている小学生と中学生にお手伝



いをしてもらい、半紙に、平和の漢字、平和のひらがなを書く。平和への願いがこもった良く書けた文字だった。その後、生け花に共同作業で取り組み、同じく平和を願うヒマワリを軸にした立派な作品ができあがった。

午後は海水浴へ。イスラエル、パレスチナで青年たちが海水浴を楽しむことはまれだろうと企画。約二時間、一六海岸というビーチで海水浴を堪能。戦時下の緊張から解かれた時だったのではないかと推察している。海水浴後、二度目の温泉へ行き、リフレッシュ。

田平で数日を過ごすことによって、交流と親睦を深め、お互いを少しは理解することができたのではないかと思っている。

8月7日。四日目。移動日。午前中は、信徒会館内の掃除、後片付け、パッキング。昼食後、長崎市内を目指し田平を出発。途中、西海国立公園である九十九島のパノラマを見るため佐世保市の船越展望所に立ち寄る。眼下に広がる島々の麗姿はここだけのものと言えよう。展望所を後に、一路、長崎市のお告げのマリア修道会本部へ。夕刻到着。施設使用についての留意事項などを聞き、部屋へ移動。夕食後、ミーティングを行い就寝。

8月8日。五日目。午前中は最初に、長崎の平和活動についての取り組みを、次に、被爆体験者の証言を聞いた。平和活動に取り組んで来た長崎のこれまでについては、放送局の記者として長崎で活動して来た経験をもとに話をしてくださった。平和への希求を絶えず持つことを強調された。

被爆証言として、4歳の幼児だった時に長崎市で被爆した方の証言を聞くことができた。実際に起きた被爆の実像を丁寧に語ってくださり、被爆者しか語れないその現実にはこころ揺さぶられるものがあった。原爆の惨状と平和の尊さは、来崎した青年たちの心にも深く突き刺さったことだろう。

午後は、長崎原爆資料館の見学。約2時間、資料館内をゆっくりと見学し、原爆の実像、惨状を体感した。その後、永井隆医師が被爆後生活した如己堂と、隣接の長崎市永井隆記念館を見学。また、被爆校舎の残る城山小学校平和記念館を訪ね、原爆と平和についての学びを得た。

夕刻、長崎県宗教者懇話会主催の原爆殉難者慰霊式典祭に参加するため爆心地に移動し、午後7時

からの式典に参加した。諸宗教による慰霊の祈り、奉納などが行われたが、キャンドルサービスでは青年たちも依頼された役割を果たした。平和を願う諸宗教者による合同の慰霊祭は、青年たちの心に平和と共生の思いを強く印象付けたに違いない。

8月9日。六日目。午前中は、平和公園で開催された長崎市主催の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加。市長による平和宣言、来賓の挨拶、献花などが行われた。酷暑のため水分補給に心掛けての参列であった。式典後、平和の鐘を鳴らす役を与えられ、12時に他の参加者と共に綱を引き、平和への願いを込めて鐘の音を響かせた。

午後、遅い昼食を摂り、小休止。夕刻は、午後7時から浦上教会堂で行われた長崎教区主催の平和祈願ミサに参列し、共に世界平和を願った。ミサ後、松明行列にも一部参加。帰宅は9時過ぎになった。

8月10日。七日目。午前中は、被爆者であり、白血病の研究者である医師による講話に耳を傾けた。原爆による人体への影響などを詳しく聞くことができ、平和がいかに大切であるかを学んだ。

午後は、主に長崎市内で活動している高校生一人署名のグループと高校生平和大使の生徒たちに、長崎の平和活動についての報告を聞いた。若い世代の取り組みは、青年たちにとって刺激とインスピレーションを得る体験となったと推察する。

8月11日。八日目。午前中は、平和の架け橋の対話の時間とした。午後は、2時から、浦上教会堂での「平和コンサート」と「平和の架け橋の集い」を開催。コンサートには近隣の方々の参加があり、平和の架け橋の集いでは、少数ではあったが、青年たちの思いや願いに耳を傾けてくれた。平和に向けての粘り強い活動や取り組みが青年たちによって今後も続けられるように願うばかりである。

8月12日。九日目。午前中は対話の時間。長崎日程での学びを分かち合った。午後は、長崎での最後の日ということで、市内を一望できる鍋冠山に出かけた。美しいパノラマに感動した後、ショッピングのために大型施設に立ち寄り、帰宅。

8月13日。十日目。午前9時過ぎ、お世話になったお告げのマリア修道会本部の施設を出発。一路、長崎空港へ。正午に空港を発ち東京へ向かった。

プロジェクトの前半を長崎で行ってくれたことに感謝している。長崎を最後の被爆地にという願いは、



田平での初日、中学生との交流。初めてのお習字で「へいわ」の書き方を教えてもらう。

長崎の誰しもが持っているが、実際に現地に立ち、原爆の実像に触れることができる人は多くはないと言えよう。今回は、戦時下にある状況の下で、不安が先行したと思われるが、少ない人数でありながらも本プロジェクトに参加してくれた青年たちがいたことをうれしく思っている。

平和への道のりは険しく、長くとも、今後も本プロジェクトが続けられ、平和の働き手となってくれる人が一人でも育ってくれるように願っている。「聖地のこどもを支える会」が、今後も、平和の種を蒔き続けて下さることに期待している。

## ボランティアに参加して

田平教会信徒（被爆二世） 今村 慶子

戦火の中のイスラエルとパレスチナ、敵対国の両国青年と日本の青年が交流し、平和の大切さを互いの心ふれあう体験の中で学び、友情を育む活動があると初めて知りました。それも今回が15回目であることを知り、そこには並々ならぬご尽力と計り知れないご苦労があるのではと、改めて感動と驚きの境地です。

世界の中で戦争が勃発すると、その脅威と恐怖は感じるものの、しっかりと身近な出来事とはとらえがたいものです。メディア等で悲惨な状況を見聞きし、何か出来ることをと思いを寄せ、皆でともに祈りを捧げ、時にはわずかばかりの募金に協力する以外になすすべを知りませんでした。

今回、三カ国の青年の平和に繋がる活動のお手伝いに、教会学校の子供達とともに参加させて頂いたこと、食事の提供を総料理長の中村神父様、スタッフの中山タリ亜様・青年の方々と共に調理できたのは、私の心の財産となりました。神様はもちろんのこと、中村神父様、そして「平和の架け橋プロジェクト」のすべての皆様方に心から感謝いたします。

青年の方々との日本文化体験では、教会学校の子供達はすぐに打ち解け（青年たちの優しさもあってですが）、知っている限りの単語を使って楽しそうにコミュニケーションをとっていました。信徒会館の

ホールには初めから終わりまで笑顔があふれ、温かい雰囲気にも包まれた中に過ごせたことは、心に残る良き思い出と経験になったことでしょう。後の感想で子供達は、ヘブライ語、アラビア語を教えてもらったこと、プロジェクト参加の皆様が習字や生け花が上手だったこと、折り紙をお話ししながら楽しくできたこと、仲良くなれて嬉しかったことなどを話していました。保護者の方も、子供達の貴重な体験を心から感謝し喜んで下さっています。

三泊四日のふれあいの中で、青年の方々には様々な活動がありましたが、互いに笑顔で協力し合う姿は関わる側としてもほっこりと心温まるものがありました。様々な場面で仲良くなっていかれ、最後の夜は青年男子の方達がふざけ合ったりじゃれ合ったりと、すっかり打ち解けられている姿がありました。女性の方たちもとても仲良くされていて、これが「平和の架け橋」なのだと思わずに納得致しました。その中で、青年たちの困難な状況に穏やかに対応されておられた理事長様はじめスタッフの皆様への関りと奉仕の姿に、参加された青年の一人ひとりを大切になされている様子を垣間見ることができました。食料にしても、大切に使い切る術を学ばせていただきました。

出発前には多量の寝具等（中村神父様が何日もかけて奮闘し準備されたものです）を天日干し、片付け、全館掃除と汗だくになり、すっきり清めて長崎へと旅立たれました。8月9日原爆記念日のNHKのニュース番組で、プロジェクト参加者のお一人がインタビューに次のように答えておられました。「自国は戦争中です。被爆者や遺族の方の気持ちがよくわかります。一日も早い平和を願っています」と。また、密着取材のNHK「おはよう日本」の放送の中で、お一人の青年は「教師になって子供たちに平和を伝えていきたい」と話されていました。

今回、参加させて頂いた子供達にも教会学校で折々に、このプロジェクトの意義を伝えて平和の尊さを考える機会を持っていただけたらと思っています。中学生の一人は「こういう機会をいただけて本当に嬉しいです。ありがとうございました。」と感想を綴っていました。

最後に「平和の架け橋プロジェクト」の皆様のご健康と、この活動が未永く続き、平和を願う人々の輪が広がっていきますようにお祈りしています。

感謝のうちに 平和を願って

## 収支決算

収入の部

単位：円

費目	摘要	金額
支援金等	受取寄付金	2,200,515
	受取助成金	500,000
	参加費	1,183,800
自己資金		877,472
合計		4,761,787

支出の部

費目	摘要	金額
旅費	国内旅費 交通費（飛行機代、マイクロバス代、ガソリン代、タクシー代他）、滞在費（宿泊費、食費など）	1,831,892
	海外旅費 航空券代	1,193,090
人件費	事務運営費	540,000
	業務委託費（ヤクブへの報酬、通訳費）	650,000
	謝礼	33,063
会議費	フェアウェルパーティー他	36,855
	施設使用料	14,500
研修費	長崎原爆資料館等入館料	33,670
情報発信費	チラシ・ポスター製作費、報告書（オリーブの木）製作費	311,276
通信運搬費	通信費・宅急便代、報告書（オリーブの木）発送代	57,610
消耗品費	各種生活雑貨	15,379
雑費	支払手数料、その他	44,452
合計		4,761,787

## 支援の内訳

一般支援団体……7団体

個人支援……139名（匿名2名含む）

他 浦上教会オルガンコンサートでの寄付

## 謝 辞

主催者 認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 と  
共催者 NGO ヨハネ・パウロⅡ世財団（エルサレム）は、  
イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋 in 長崎」2024 プロジェクトの計画・実施に際し、  
あらゆる面で温かくご支援、ご指導くださった下記の団体および個人、  
さらにすべての支援者・ボランティア・支援団体の方々に対し、心から感謝の意を表します。

独立行政法人 国際協力機構（JICA）、公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団、  
長崎大司教区：中村倫明大司教と高見三明名誉大司教、  
中村満師とカトリック田平教会、カトリック浦上教会、お告げのマリア修道会、純心聖母会、  
社会福祉法人「恵の丘」長崎原爆ホームと築地重信氏（被爆者）、  
長崎宗教者懇話会（原爆殉難者慰霊式典主催者）と出射優行事務局長、  
高校生一万人署名活動・高校生平和大使、  
畠山博幸氏（ジャーナリスト）、増川雅一氏（被爆者）、朝長万左男氏（長崎大学名誉教授）、  
鈴木信一師（聖パウロ修道会管区長）、  
福島良典氏（毎日新聞論説委員長）、澤本快氏（NHK ディレクター）、  
川野由起氏（朝日新聞記者：過去のプロジェクト参加者）、  
イスラエルとパレスチナの平和を願う会（道の会巡礼者有志）

認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上 弘子

ヨハネ・パウロⅡ世財団（エルサレム）

理事長 イブラヒム・ファルタス神父（フランススコ会副管区長）

## 「平和の架け橋プロジェクト2024」の一コマ



「恵の丘」原爆ホーム聖堂で築地重信氏の「被爆体験」を拝聴。聖堂での記念写真。



8月8日原爆殉難者慰霊祭でキャンドルサービスに参加した3カ国の若者たち。



互いの話に耳を傾ける。



8月11日「平和オルガンコンサートと対話集会」に駆けつけてくださったボランティアの方々と。



田平の小学生・中学生との交流。楽しい時間を過ごした。



8月9日長崎平和祈念式典を終えて。



田平での最初の日、ピクニックで自然を満喫。仲良くなる第一歩。



8月9日平和祈願祭のポスター。被爆のマリア像。

## 飼い葉桶乳児院の子どもたち



写真撮影：澤本快、川野由起、中山夕里亜、ヤクーブガザウィ、サハル・マスラウィ、タマル・ダニエル、クレール・ガザウィ、ワシム・アラミ、ラハド・シオ、Sr. ドニーズ、清原崇、金森早紀、立正佼成会



ピッツアパツラ枢機卿、ガザ避難者を訪問

